

# 令和4年度(2022)長崎県新収集資料

長崎県が新たに収集した資料を、長崎歴史文化博物館「シーボルト来日200周年記念大シーボルト展」(会期:2023年9月30日～11月12日)で初公開しています。

[展示No.4-17 図録105ページ]



## 崎陽湊之景

玉錦浦画 岡田半江賛  
文政9～10年(1826～27)頃  
縦76.0×横123.0cm

令和4年度長崎県収集資料。大坂相撲頭取の竹縄が九州一円での相撲興行中(文政9～10)に入手した本画に、賛を頼まれた岡田半江が竹縄自賛の伝を書き加えたもの。本資料はいわゆるシーボルト台風前の長崎港の様子(文政8～10年頃か)、とくに浦上村淵側の情報量が多いのが特徴です。

[展示No.5-08 図録116ページ]



## NAGASAKI 段丘にある寺院(本蓮寺境内)

アルベルト・ベルク  
1864～73年  
縦38.0×横46.0cm

令和4年度長崎県収集資料。シーボルトは1862年、長崎を再び訪れ、本蓮寺(現・筑後町)を宿所としたが、本画は、その前年の1861年2月17～24日に長崎に滞在したプロイセン東アジア遠征隊の一員で画家のアルベルト・ベルク(1825-84)が描いたものです。

[展示No.5-15 図録121ページ]



## Domestigrie(商家の使用人)／掛取人物図

川原慶賀  
文久2年(1862)  
46.5×25.0cm

「文久2年正月」とある掛取帳を手にした夏季の商家の使用人。描いたのはシーボルトのお抱え絵師としても活躍した川原慶賀で、左下に青鉛筆で「Domestigrie」との書き込みがある。書き込み主は1862年1月23日～5月7日に長崎に(帰国のため)滞在していたシーボルトと見られ、慶賀とシーボルトの再びの交流の可能性を知りうる作品。

さらに、この年次がこれまで慶賀最晩年の作として確認されてきた万延元年(1860)の「永島キク刀自絵像」の2年後にあたることから、晩年の慶賀の様子を知りうる作品としても注目できます。

令和4年度長崎県収集資料。本資料は、現在、年号が確認できる慶賀作品としては最も後年の新発見資料です。

本画は、国内屈指の幕末科学技術資料を蒐集され、長崎歴史文化博物館常設展示の「火縄銃から近代銃へ」のコーナーでも資料提供をいただいた萩市幕末史料専門員の故・小川忠文氏(令和4年10月ご逝去)が発見されたものです。生前、小川氏は、この作品を長崎の地で展示・公開することを熱望され、ようやくここに実現しました。